

### 第3回 JRローカル線 維持・利用促進検討協議会 主な発言

区 分	内 容
●有識者のコメント	
畑本委員 (有識者)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワーキングチームの報告で社会活動家(※)を巻き込んだ取組があった。次年度以降、もっと社会活動家を巻き込んだ取組を展開してもらいたい。</li> <li>・社会活動家のネットワークをつくれば、幅広く意見交換できる。私は姫新線の沿線で活動しているが、山陰線に関して意見できることもあると思うので、路線の枠を超えた意見交換の場を設けてもよいのではないか。</li> </ul>
谷本委員 (有識者) ※欠席のためコメント発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・今後は、とりまとめた利用促進策を淡々と実施するのではなく、効果が得られそうな対策を横展開するなど、戦略的に実施することが必要になる。協議会やワーキングチームを継続し、多様な組織の間でのコミュニケーションを続けていくことが重要。</li> <li>・利用促進の観点にとどまらず、利用が少なくても、しぶとく続けていける、これまでにはない体制や仕組みづくりを検討してもらいたい。人口が減少する我が国においては、利用が少なくてもやっていけるという視点が決定的に重要。</li> <li>・新たな鉄道の使い方、つき合い方という視点で、地域にも鉄道会社にも儲かる可能性を探ることも大事。</li> <li>・電子チケットの販売、どこでも定期券や学割での購入ができるサービスなど、今回の対象路線を新たなサービスのテストマーケティングの場として位置付け、そこに住民や起業家も含め幅広い参画があれば、これまでとは違った展開も生まれるのではないか。</li> </ul>
古田委員 (有識者) ※欠席のためコメント発表	<ul style="list-style-type: none"> <li>・マイレール意識の醸成を一つのポイントとするとともに、兵庫DCや「ひょうごフィールドパビリオン」といった、兵庫ならではの観光の展開をローカル線の利用促進につなげていくことに重点を置いたのは良いと思う。</li> <li>・今後、マイレール意識の醸成については、具体的なアクションプランを作成する際に、JRを含め、老若男女、多くの地域の方々に参加してもらえる仕組みも一緒に構築できると良い。</li> <li>・ローカル線にはそれぞれの固有な特性があるはずなので、義務ではなく地域愛をもって、それを多面的に見つけ出して活用できると良い。そこに将来のマネタイズもあるはずである。また、これからの環境への取組にも重ねていくことができ、それがニッチな観光誘客にも繋がる。</li> </ul>
●意見交換	
藤岡委員 (朝来市長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワーキングの体制については、関係者が連携して推進することが必要である。</li> <li>・利用促進は継続が何よりも重要。今後も、朝来市と神河町で連携しながら、しっかりと利用促進に取り組んでいきたい。</li> </ul>
片山委員 (西脇市長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまでも丹波市と西脇市は利用促進に向けた意見交換を行ってきたが、このたび JR 加古川線維持・利用促進検討連絡会を設置した。一層強い連携のもと利用促進に取り組んでいきたい。</li> <li>・来年度の予算としては、NHK の BS 番組に出演している著名な鉄</li> </ul>

	<p>道写真家の講演や、フォトコンテストの実施を想定している。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・同じく、NHK の BS 番組のロケ地になるように、加古川線だけでなく、山田錦の郷である北播磨地域の北条鉄道や神戸電鉄粟生線も含めた酒蔵エリアの PR を県と一緒に進めていきたい。加古川線は今まで観光という点で注目を浴びてこなかったが、この 2 つの番組で地域のポテンシャルを PR していきたい。</li> <li>・サイクルトレインについては、沿線の中学校の統合もあり、中学生が自転車を積んで JR で通学することで、鉄道利用にも繋がるし、他地域にはない社会実験的な新しい試みとして考えている。</li> <li>・恒常的に来てもらえるような仕組み作りが必要。観光をキーワードにした、採算がとれる仕組みを作りたい。</li> </ul>
<p><b>田中委員</b> (たつの市副市長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・姫新線は、早くから「姫新線利用促進・活性化同盟会」で、利用促進に取り組んできた。300 万人乗車作戦では、目標を超えて 322 万人まで増えたが、コロナ禍で低迷している。通学利用は回復しているが、テレワークなどにより、通勤利用が増えない状況。</li> <li>・通勤・通学に注力していたが、これからは観光の力で利用者を増やしていきたい。本竜野駅の近くの重伝建（重要伝統的建造物群保存地区）に誘導ができる施策を実施したい。佐用町のホルモンうどんを活用した PR も実施したい。</li> <li>・かつては落語列車や大正ロマン列車など特別列車を運行していたが、今は JR が実施は難しいという判断。復活させたい。</li> <li>・園児の送迎において、駅に送迎ステーションを設置し、そこから園バスで送迎することで、保護者は駅まで車で送迎し、そこから電車で通勤するなど、駅の使い方も考えていきたい。</li> </ul>
<p><b>藤岡委員</b> (朝来市長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・朝来市では、DC の実施期間に合わせて、来年度予算編成の中で、JR や旅行会社と一緒に何かツアーの造成ができないかと検討している。JR、旅行会社、兵庫県にもよろしくお願ひしたい。</li> </ul>
<p><b>木崎委員</b> (日本旅行業協会)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キーワードとして、観光、インバウンド、二次交通等の言葉も入っている。取組を風化させるのではなく、継続することが大事。</li> <li>・コロナ禍で人流がストップしていたのでデスティネーションキャンペーン等に期待している。観光需要が盛り上がりれば利用者も増え、地域の活力（マイレール意識の盛り上がり）にも繋がる。</li> <li>・二次交通は、「ちょい乗り」など、民間と連携した駅周辺の賑わいづくりが重要である。</li> </ul>
<p><b>水田委員代理</b> (県バス協会)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「バス旅ひょうご」を県内 5 つのエリアでバス乗り放題の切符として発売している。少しずつ発売枚数も増えてきている。</li> <li>・利用促進に向けた取組も、継続することでマイレール意識が醸成される。特に沿線住民が、マイレール意識を高めていくことは重要である。あったほうがいいという意識はあるが、それを利用し、残そうという意識を高めていくことが重要。</li> <li>・「バス旅ひょうご」も、鉄道とコラボできたらと思う。但馬では従来は高速バスのみでの乗り放題としていたのを昨年度のプレ DC では路線バスだけのものも用意した。</li> <li>・湯村温泉は、城崎温泉に比べて徐々に利用者が減っている。両温泉のコラボとして、JR で城崎温泉から浜坂まで行ってもらい、浜坂から湯村温泉までバスで行ってもらうルートを設け、JR と</li> </ul>

	共同した取組ができれば、鉄道利用も増える。
関貫委員 (豊岡市長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・但馬、豊岡市のエリアは観光がターゲット。まずは観光利用を推進すべき。それに続いて、日常利用も増えればいいと考えている。</li> <li>・今後は、但馬エリアの交通を運営する全員が一丸となって利便性を高め、利用者と呼込むアピールとなる取組を進めていきたい。</li> </ul>
國弘委員 (JR 西日本兵庫支社長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・半年間の議論で、ローカル線の厳しい現実に関して、認識を共有できたことは、大きな収穫。</li> <li>・対象の4路線6区間は、鉄道の特性を十分に発揮できていない。鉄道を維持することだけを目的とした利用促進策に、違和感と既視感を覚えている。ありがとう運動などのキャンペーンは繰り返し実施してきたが、利用は激減してきた。播但線や山陰線で、輸送密度2000人を5年後に目指しているように、定量的な目標を設定すべき。各委員は、今回提示された取組により、どれほど利用が増えるとお考えでしょうか。</li> <li>・マスコミ報道などで、バスの方が目的地近くまで行くことができ便利という地元の高校生の声や、何十年と鉄道に乗らず、どこに行くにも車移動だという沿線住民の声が紹介されている。地域の実際の声を真摯に受けとめ、実態を把握し、データとファクトに基づいた現実的な取組を進めていくべき。</li> <li>・人口減少や車社会の進展、IT化など取り巻く環境の変化とともに、対象線区の利用は大きく減少している。地域住民から選択されていないことの証左である。問題を先送りせず、解決に向けた行動を起こす決断が必要。『特定の交通手段だけに特化せず、ネットワーク全体が望ましいあり方となるよう、地域の複数の交通手段相互の連携や役割分担に留意し、交通ネットワーク全体の最適を目指す。』これは、ひょうご公共交通10カ年計画の文言である。鉄道だけを除外せず、地域に最適な交通の構築を目指していただきたい。当社も地域住民と一緒に模索し、実現に向けて貢献していきたい。</li> <li>・ノスタルジーではなく現実直視で、現状維持ではなく未来志向で、躍動を期して新たな挑戦を起こし、本質的な議論を開始することを是非ともお願いしたい。</li> </ul>
藤岡委員 (朝来市長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この協議会での議論は、維持を前提としない議論ではなく、利用促進の取組に注力することを了解して始まったと認識している。</li> <li>・本市の取組でいうと、職員が4月から鉄道通勤を始めている。JRの輸送密度から考えると乗車距離はまだまだだが、各関係機関、団体とも協議して、しっかりと利用促進に努めていく。</li> </ul>
片山委員 (西脇市長)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・JRには民間企業としてのサービス向上もお願いしたい。大阪行きの特急が谷川に停車しているときに、扉が閉めっぱなしで、加古川線から乗り継いで乗車できないことがある。</li> <li>・乗ってもらえないから諦めるのではなく、いかに乗ってもらえるかを考えるのがこの協議会の主旨。いろいろなモビリティとの連携も考えていく。</li> </ul>
服部副知事	<ul style="list-style-type: none"> <li>・この協議会の目的そのものが、鉄道を維持していくために、いかに利活用を頑張るかというところ。</li> <li>・既視感があるとの発言もあったが、首長、地元、有識者等が知恵</li> </ul>

	<p>を絞り、これから頑張っていくというタイミングである。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・兵庫 DC、大阪・関西万博での「ひょうごフィールドパビリオン」の取組もあり、非常に大事な 3 年間である。一朝一夕にはできないので、JR だけに押し付けるのではなく、行政も、我が事としてしっかり取り組みたい。</li> <li>・前提を置かない議論は、今国会で関連法案の改正等が議論されているので、国や他府県の動きに注視していきたい。</li> </ul>
<p><b>國弘委員</b> (JR 西日本兵庫支社長)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・私共も、多くの方々に鉄道を利用していただきたいという思いは同じ。</li> <li>・協議会やワーキングチーム等で議論できることは非常にありがたい。今後も連携を深めて、効果が見込まれるアイデアはぜひ実現していきたい。</li> <li>・JR として、対象区間をいきなり廃線にしたいといったつもりは全くなく、利用実態と大量輸送機関の鉄道インフラとのミスマッチをそのままにするのではなく、現実的に考えていきたいというのが本心。</li> <li>・赤字だからということではなく、利用状況からして鉄道としての特性を十分発揮できないということを理解いただきたい。</li> </ul>
<p><b>齋藤知事</b></p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・沿線の首長、地域の社会活動家からの意見、JR からの将来的な方向性についての意見は、決して対立ということではなく、一緒になって鉄道利用者を増やし、観光も含めて地域を活性化していきたいという思いで、同じ方向を向いている。</li> <li>・大事なものは、より多くの方に使い勝手がいい、便利だということを感じていただけるようにしていくこと。</li> <li>・JR も決して赤字だからとか、数字だけの議論ではないということなので、これからも利用者ファーストの目線で取り組んでいきたい。そのスタートとして、この協議会の枠組ができたことは、危機感を持つということも含めて、大きな成果。これからも、それぞれの役割の中で進めていきたい。</li> </ul>

(※) 社会活動家・・・活動の大小に関わらず、社会を良くするため、社会に貢献するために活動する人を指す。